

研究資料

西行物語繪卷

宮次男

(一)

『考古畫譜』の西行物語繪卷の項に

〔補〕同異本 三卷

〔補〕松平隱岐守家藏、

〔補〕眞頼曰、此の摸本、博物館にあり、摸本奥書に云、書畫筆者不_レ知、右西行物語三卷者、松山侯所持、天保九年戊戌孟春令_二摸寫_一畢、花押、と見えたり、普通の本とは、繪詞ともに異なり、異本と稱すべし、

とあって、松山の松平家に西行物語繪卷三卷が襲藏されていたことが、早くから知られていたわけであるが、これがいかなるものなのか、一般には殆んど紹介されることがなかった。昭和三十八年十一月十五、十六日に当研究所の開所記念行事として「稀観繪卷物展」が開催され、その際、大阪の久保惣太郎氏蔵西行物語繪卷三卷が陳列されたが、その時、これの解説を担当した私は、添状及び外箱貼紙に伊予久松家伝来と書かれているにもかかわらず、この追求をせずに草々に解説文を執筆したのであった。その後、この確証を得ようとして、東京国立博物館蔵の摸本とこの繪卷を比較検討したら、まさしく、これが東博摸本の原本となった繪卷であることが確かめられた。すなわち、東博摸本は、上巻の奥書に

書畫筆者不知

右西行物語上巻者以松山侯所藏
眞跡令摸寫畢

天保七年歲次丙申八月下旬

晴川院法印（花押）

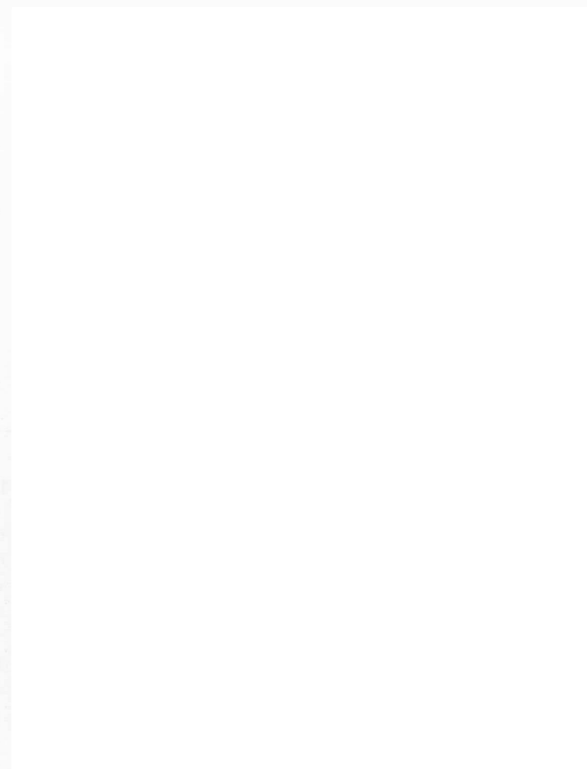
下巻の奥書に

右西行物語三卷者松山侯所持 繪詞筆者不知

天保九年戊戌孟春令摸寫畢（花押）

とあって、『考古畫譜』所引の奥書をもっている。さらに、東博摸本上巻では、原本の紙継ぎが墨線で示されていて、それが久保家本と全く一致しており、また詞書の虫喰い箇所も久保家本通りに写されているから、東博摸本は久保家本を摸寫したことは明らかである。このことは、久保家本がもと松山侯所持本であったことを証するといえよう。

次に、佐々木信綱、川田順、伊藤嘉夫、久曾神昇編文明社版『西行全集』（昭和十六年二月）によると、ここには西行物語が六種収録されていて、久曾神昇氏解説によるとこれらは西行物語として流布するものの中で注意すべき本で、1「伝土佐経隆筆西行物語繪卷」残欠二卷（徳川黎明会、大原家分蔵の繪卷）2「文明十二年本西行物語」（続群書類従所収）、3「西行一生涯草紙」六卷（史籍集覽所収）、4「海田采女筆西行物語繪卷」五卷（続群書類従に西行物語繪詞として収録、また春夏秋冬の四巻として「西行四季物語」の書名で元禄四年、宝永五年、享和三年に刊行している）、5「板本西行物語」三卷（正保三年、寛文十三年、元禄五年、宝永二年にそれぞれ刊行、続帝國文庫、続高僧実伝に収録）、6「西行上人発心記」（神宮文庫蔵、5に最も近い系統のもの）である。このうちの5「板本西行物語」と本繪卷詞書を比較すると、公刊に注記した相違や、用字、行文にかなり相違はあっても、もとは同一祖本によると推定して間違いないと考えられるのである。さらに、「板本西行物語」と最も近い系統にある「西行上人発心記」は、本繪詞を改竄し、平易化して、或いは和歌を追加挿入したところがあった



挿図1 西行物語絵巻
上巻巻頭詞

大阪 久保家蔵



挿図2 西行物語絵巻
下巻第22段詞

大阪 久保家蔵

も、本絵詞と同一系の異本とみることができるのである。また、板本と本絵詞との相違個所を発心記について校合した結果を公刊に注記しておいたが、それによると、板本と発心記が一致する個所もあるが、発心記と本絵詞が一致しないとは同意味の記述である個所もかなりあって、これらのことから、板本と発心記は本絵詞を親として兄弟関係に成立したとみなされるのである。このように三者の関係を推定すると、発心記のみにある巻末の定家の和歌、西行閑居の折り念仏のあい間に詠んだ釈教歌（公刊注119参照）はもと本絵詞にも存在した可能性が生じてくるのである。さらに、本絵巻の最後の詞書が余白をのこさず、紙継ぎの所で終わっている（挿図2）ことは、本絵巻にも発心記にみる定家及び西行の和歌が存在していたことを示唆すると思われることができるのである。もし、この推論に誤りがないとすれば、板本は、本絵詞によってつくられたということになろう。

以上のようなわけで、本絵詞を公刊し、西行物語及び同絵巻研究の一資料と

して提示したいと思うのである。但し、板本に挿入された図は本絵巻とは直接的な関係はないもののようなのである。

なお、この調査には前記『西行全集』に負うところが甚だ多かった。諸先学の業績に対し深く感謝の意をあらわす次第である。

(二)

ここに提示する西行物語絵巻は全三巻、紙本着色で、各巻の外題は金泥雲形文をおいた題簽（縦一三・七纏 横二・八纏）に「西行物語上（中・下）」と墨書され、内題は上巻だけに「西行物語」と書かれている。（挿図1）

上巻は天地三一・九纏、全長一四二六・六纏、二十七枚、詞絵とも九段。中巻は天地三一・九纏、全長一二一五・三纏、二十三枚、詞絵とも一五段。下巻は天地三一・九纏、全長一六九三・七纏、三十二枚、詞絵とも二十二段。したがって、詞と絵とが同一紙に書かれた場合が多く（寸法表参照）、その区切りに

は細い墨線が引かれている。
次に絵の主題を列記する。

上巻

- 一 憲清（西行）の館、紅梅美しく咲く。
- 二 1 憲清鳥羽殿の障子絵の歌をよみ、大刀（朝日丸）を拝領す。
2 女院に召され、中納言の局よりかさね十五の御衣を賜わる。
- 三 憲康の死をいたむ。
- 四 憲清出家の願いを奏上す。
- 五 1 四歳の愛娘を縁より蹴落す。
2 妻と別れを惜しむ。
- 六 西山の聖のもとにて出家剃髪。
- 七 西山に柴の庵を結び新年を迎える（雪山、門松を売る人々橋を渡る）。
- 八 庵前の梅を行く人愛でる。（図版Ⅰ）
- 九 花見に旧友がたずねきて、昔を語ってなつかしむ。

中巻

- 一 伊勢神宮に参詣す。
- 二 二見浦に庵を結び、風景を愛でる。（図版Ⅱ）
- 三 神官らと共に御裳濯川の桜を愛でる。
- 四 月読の宮に詣で、月光を賞す。
- 五 親しい人々と別れを惜しみ、一夜の宴を催す。
- 六 東国に向い、天竜川の渡にて難に遇う。
- 七 小夜の中山の明神に詣ず。
- 八 岡部の宿の御堂にて、都の僧が病死して笠のみ遺るをみて哀をもよおす。
- 九 宇津の山辺をすぎ、清見関にて月を賞す。
- 一〇 はるかに富士山を眺望し和歌をよむ。

- 一一 相模国大場のとがみが原にて鹿鳴をきく。
- 一二 武蔵野にて老僧の庵を訪れる。
- 一三 白河の関屋の柱に和歌を書く。
- 一四 野中の賤が伏屋にて都の知人を思う。
- 一五 実方中将の墓を弔う。

下巻

- 一 奥州平泉に藤原秀衡の館を訪れる。
- 二 山かげの埴生の宿にきりぎりすの声をきき、あわれをもよおす。
- 三 ある野中の家にて、青柳、梅の美しさに心ひかれ、その伏屋に逗留す。
- 四 美濃国にて時鳥の鳴くをきき、都をなつかしむ。
- 五 都に帰り旧友をたずねるが、友は歿し妻女をなくさむ。
- 六 北山の奥に庵を結ぶ。
- 七 宝金剛院の紅葉をみて近衛局に和歌をおくる。
- 八 七月十五日、京中の人々船岡蓮台野にて故人を弔う。
- 九 中の院の右大臣とよもすがら語る。
- 一〇 四国へ旅立つに際し、賀茂の社に詣ず。
- 一一 待賢門院の女房が隠棲する小倉山の草庵を訪れる。
- 一二 天王寺へ詣でる途中、江口の君の宿に雨やどりを請う。
- 一三 四天王寺に参詣す。
- 一四 讃岐にて新院（崇徳上皇）の墓所を弔う。
- 一五 善通寺の附近にて庵を結ぶ。
- 一六 都に帰り、旧友から家族の消息をきく。
- 一七 冷泉殿の近くに娘をたずねる。
- 一八 冷泉殿のもとへ娘を迎えるための車を遣わす。
- 一九 西行の娘剃髪し、西行から戒を受く。
- 二〇 西行の娘尼、高野の麓天野に母尼をたずねて、共に勤行す。

二一 西行大原の奥にこもる。(図版Ⅲ)

二二 花のもと、西行往生を遂ぐ。

(三)

絵画的にこの絵巻の各画面を考察すると先ず考えられることは、全体を通じて、平安朝以来の古典的なやまと絵の伝統を継承しているということである。すなわち、四季絵、名所絵的な要素をたぶん含んでいて、さらにそれらが繊細な気分で表現してあり、人物像が小さく描かれているのである。

このことは、古本西行物語絵巻にみる、自然景を重視した観照法と同系統の画面構成とすることができるであろう。また、この絵巻の岩山にみる皴法は、細い墨線を鉤形に重ねる方式をとって(図版Ⅲ参照)、これは、源氏物語絵巻関屋の段や、松平家蔵法華経の見返絵につながる古典的な様式をもつものように思われる。このような細部の描法はともかく、この絵巻全体を覆う画趣は情緒性が濃く、その点は古本西行物語絵巻にも通ずるが、これは歌人西行の行状をあらわすにふさわしい歌絵の伝統によるものと思われる。さらに風景描写を主とした伊勢二見浦(中一・二・図版Ⅱ)、富士山(中一・〇・挿図3)、武蔵野(中一・一・一二)をみると伊勢新名所歌合絵巻に相通じる観照法がみられて、歌絵としての画趣が、つよく感じられるのである。このように、本絵巻には情趣を重んじた歌絵的表現が強くみられ、これが古典的なやまと絵の伝統を汲んで製作されていることは明らかである。したがって本絵巻の原本(のちにのべるように本絵巻は一種の摸本と考えられる)の製作はやまと絵の古典的な様式が十分に残っていた鎌倉時代につくられたものと考ええてよいであろう。また、詞書の書風も、すっきりと形が整っていて、特に上巻巻首はみるべきである。しかし、巻を追って、やや力強さの点で劣る傾向がある(挿図1、2参照)。とはいうものの、全体としての趣きは、上代様の書風をうけついで、古様な格調を保っているといえることができるのである。

挿図3 西行物語絵巻中巻第10段

大阪 久保家蔵

二二

う。

本絵巻が摸本的性質をもつことは、詞書と絵が同一紙面に書かれていること、その区切りを墨線を引いて区画していること、また、巻を追って、画面が狭小になってゆく傾向があり(挿図4)、これは転写に際して省略されたかと思えることなどから、理解することができ、それでは、本絵巻の摸写年代は一体、何時頃においてよいであろうか。

東博摸本の奥書は、原本(久保家本)を鑑定して「書画筆者不知、

「絵詞筆者不知」と述べているが、晴川院のいう通り、この絵の作風は独自のものがあって、筆者なり製作年代を比定することは困難である。しかし、画面にはいわゆる奈良絵的な下手^{びて}っぽさは全くなく、一種の情感があらわられていてかなりの格調を保っており、古様な作風を伝えていることは否定できない。色彩も明るい色感によっていどられて嫌みがない。しかし、人物の描線はややかたくなって暢びがない。この種描線は、南北朝から室町時代を通じて、絵巻の摸本にままみられるところで、金蓮寺別本一遍上人絵伝や、御影堂本一遍聖絵（本誌第二四四号図版Ⅰ、Ⅱ参照）などに同質の描線が認められるのである。この両者の摸写年代については、御影堂本は南北朝末、金蓮寺本もほぼ同時期とみられる、しかしいずれも確証あるわけでない。南北朝の末から室町時代に

かけては、古典的伝統をくんだやまと絵巻が、変質する時期で、一方においては保守的な様式が温存するかと思えば、他方、安易な表現によって物象を描いた下手っぽい作品がつくられ、さらに、室町時代土佐派画系による新しいやまと絵が生まれてくる時代である。このような変革期の一作品として、本絵巻も存在するわけであるが、どちらかというところ、その様式や作風は古様であり、室町時代もあまり降らない頃の摸写ではないかと一応ここでは推定するにとどめておく。いずれにしても、中世における西行物語絵巻としては完本であり、その点注目に価する遺品といえよう。

挿図4 西行物語絵巻下巻第6段

大阪 久保家蔵

西行物語絵巻寸法表 単位cm

| 上 卷 | | | |
|-----|----|--------|---------|
| 外 題 | 天地 | 13.5 | |
| | 幅 | 2.8 | |
| 見返し | 天地 | 31.8 | |
| | 幅 | 36.9 | 内返し 1.0 |
| 本 紙 | 天地 | 31.9 | |
| | 全長 | 1426.6 | |
| 第1紙 | 詞 | 52.5 | |
| 2 | 〃 | 53.5 | |
| 3 | 〃 | 53.5 | 絵 5.0 |
| | 絵 | | |
| 4 | 〃 | 53.6 | |
| 5 | 〃 | 53.5 | |
| 6 | 〃 | 53.5 | 絵 8.5 |
| | 詞 | | |
| 7 | 〃 | 53.7 | |
| 8 | 〃 | 53.7 | |
| 9 | 〃 | 53.6 | 絵 37.8 |
| | 絵 | | |
| 10 | 〃 | 53.7 | |
| 11 | 〃 | 53.7 | |
| 12 | 〃 | 53.6 | 絵 28.8 |
| | 詞 | | |
| 13 | 〃 | 53.6 | |
| | 絵 | | |
| 14 | 〃 | 53.7 | |
| 15 | 詞 | 53.7 | |
| 16 | 〃 | 53.6 | 絵 41.2 |
| | 絵 | | |
| 17 | 〃 | 53.6 | 絵 34.0 |
| | 詞 | | |
| 18 | 〃 | 53.7 | |
| 19 | 〃 | 53.7 | 絵 18.5 |
| | 絵 | | |
| 20 | 〃 | 53.6 | 絵 27.8 |
| | 詞 | | |
| 21 | 〃 | 53.7 | 絵 47.0 |
| | 絵 | | |
| 22 | 〃 | 53.5 | 絵 8.3 |
| | 詞 | | |
| 23 | 〃 | 53.7 | 絵 20.0 |
| | 絵 | | |
| 24 | 〃 | 53.5 | 絵 26.3 |
| | 詞 | | |
| 25 | 絵 | 53.0 | 絵 46.5 |
| 26 | 詞 | 53.4 | 絵 39.3 |
| | 絵 | | |
| 27 | 〃 | 34.5 | 絵 7.1 |

| 中 卷 | | | |
|-----|----|--------|---------|
| 外 題 | 天地 | 13.7 | |
| | 幅 | 2.8 | |
| 見返し | 天地 | 31.8 | |
| | 幅 | 37.7 | 内返し 1.1 |
| 本 紙 | 天地 | 31.9 | |
| | 全長 | 1215.3 | |
| 第1紙 | 詞 | 52.8 | |
| 2 | 〃 | 53.6 | |
| 3 | 〃 | 53.3 | 絵 45.0 |
| | 絵 | | |
| 4 | 詞 | 53.4 | 絵 23.8 |
| | 絵 | | |
| 5 | 〃 | 53.7 | 絵 31.8 |
| | 詞 | | |
| 6 | 〃 | 53.4 | 絵 3.0 |
| | 絵 | | |
| 7 | 〃 | 53.5 | 絵 28.4 |
| | 詞 | | |
| 8 | 〃 | 53.5 | 絵 3.2 |
| | 絵 | | |
| 9 | 〃 | 53.5 | 絵 13.6 |
| | 詞 | | |
| 10 | 〃 | 53.5 | 絵 19.8 |
| | 絵 | | |
| 11 | 〃 | 53.5 | 絵 7.0 |
| | 詞 | | |
| 12 | 〃 | 53.5 | 絵 39.3 |
| | 絵 | | |
| 13 | 〃 | 53.7 | 絵 1.5 |
| | 詞 | | |
| 14 | 〃 | 53.7 | 絵 30.9 |
| | 絵 | | |
| 15 | 〃 | 53.8 | 絵 8.3 |
| | 詞 | | |
| 16 | 〃 | 53.2 | 絵 33.8 |
| | 絵 | | |
| 17 | 〃 | 53.8 | 絵 34.7 |
| | 詞 | | |
| 18 | 〃 | 53.7 | 絵 14.2 |
| | 絵 | | |
| 19 | 〃 | 53.5 | 絵 10.5 |
| | 詞 | | |
| 20 | 〃 | 53.5 | 絵 9.5 |
| | 絵 | | |
| 21 | 〃 | 53.7 | 絵 12.8 |
| | 詞 | | |
| 22 | 〃 | 53.8 | 絵 39.8 |
| | 絵 | | |
| 23 | 〃 | 53.8 | |
| | 詞 | | |
| 24 | 〃 | 53.6 | 絵 24.2 |
| | 絵 | | |
| 25 | 〃 | 53.7 | 絵 30.4 |
| | 詞 | | |
| 26 | 〃 | 53.7 | 絵 22.6 |
| | 絵 | | |
| 27 | 〃 | 53.7 | 絵 8.3 |
| | 詞 | | |
| 28 | 〃 | 53.6 | 絵 13.1 |
| | 絵 | | |
| 29 | 〃 | 37.0 | 絵 21.3 |
| | 詞 | | |
| 30 | 〃 | 37.0 | 絵 8.0 |
| | 絵 | | |

| 下 卷 | | | |
|-----|----|--------|---------|
| 外 題 | 天地 | 13.7 | |
| | 幅 | 2.8 | |
| 見返し | 天地 | 31.8 | |
| | 幅 | 37.2 | 内返し 1.1 |
| 本 紙 | 天地 | 31.9 | |
| | 全長 | 1693.7 | |
| 第1紙 | 詞 | 52.7 | |
| 2 | 〃 | 53.7 | |
| 3 | 〃 | 53.7 | 絵 2.3 |
| | 絵 | | |
| 4 | 〃 | 53.5 | 絵 10.3 |
| | 詞 | | |
| 5 | 〃 | 53.8 | 絵 15.4 |
| | 詞 | | |
| 6 | 〃 | 53.8 | 絵 25.8 |
| | 絵 | | |
| 7 | 〃 | 54.0 | 絵 6.8 |
| | 詞 | | |
| 8 | 〃 | 53.7 | 絵 15.7 |
| | 絵 | | |
| 9 | 〃 | 53.7 | 絵 21.6 |
| | 詞 | | |
| 10 | 〃 | 53.7 | 絵 3.0 |
| | 絵 | | |
| 11 | 〃 | 53.6 | 絵 25.6 |
| | 詞 | | |
| 12 | 〃 | 53.7 | 絵 15.2 |
| | 絵 | | |
| 13 | 〃 | 53.7 | 絵 14.5 |
| | 詞 | | |
| 14 | 〃 | 53.8 | 絵 31.8 |
| | 絵 | | |
| 15 | 〃 | 53.7 | 絵 22.9 |
| | 詞 | | |
| 16 | 〃 | 53.6 | 絵 38.9 |
| | 絵 | | |
| 17 | 〃 | 53.8 | 絵 21.5 |
| | 詞 | | |
| 18 | 〃 | 53.8 | 絵 21.1 |
| | 絵 | | |
| 19 | 〃 | 53.8 | 絵 33.3 |
| | 詞 | | |
| 20 | 〃 | 53.8 | 絵 11.0 |
| | 絵 | | |
| 21 | 〃 | 53.8 | 絵 21.7 |
| | 詞 | | |
| 22 | 〃 | 53.7 | 絵 33.1 |
| | 絵 | | |
| 23 | 〃 | 53.6 | 絵 34.0 |
| | 詞 | | |
| 24 | 〃 | 53.8 | 絵 20.9 |
| | 絵 | | |
| 25 | 〃 | 〃 | 絵 30.3 |
| | 詞 | | |
| 26 | 〃 | 53.7 | 絵 3.1 |
| | 絵 | | |
| 27 | 〃 | 53.6 | 絵 18.8 |
| | 詞 | | |
| 28 | 〃 | 53.8 | 絵 3.6 |
| | 絵 | | |
| 29 | 〃 | 53.8 | |
| | 詞 | | |
| 30 | 〃 | 53.9 | 絵 18.8 |
| | 絵 | | |
| 31 | 〃 | 53.7 | 絵 31.0 |
| | 詞 | | |
| 32 | 〃 | 53.7 | 絵 6.9 |
| | 奥 | | |

西行物語繪巻 詞書(公刊)

久保家本を底本とし、改行はすべて原文通りであるが、原文の異体文字は現行のものに改めた。また、板本西行物語と西行上人発心記を校合に用い、これを注記した。

(上巻)

西行物語

鳥羽院の御時北面にめしつかはれし人付き

左兵衛尉藤原憲清出家の後ハ西行法師と云

彼先祖は天の兒屋根の尊十六代の後胤鎮守府

の將軍秀郷に九代末孫左衛門大夫秀清にハ孫

康清にハ一男也弓矢の家に傳りて武藝のほまれ

をほとこす養由か百矢のかいなさしを習ひ張長か

三畧の書をきはむ九文を好てハ菅家紀家舊

草を學して螢ひろい雪をあつめて身を照媒と

す管絃の道もくらからす故に我國の風なれば和哥に

至ハ素戔嗚尊八雲たついつもやへかきの詠を本

として三十一字の大和詞葉を始置給しより以來

人丸赤人の事は申におよはず其外此道をもて

あそひ富の小河の流を酌もの在原の業平躬恒

貫之宇治山の喜撰才なりされともかれたる本草に

花をさかせ情なき鬼神のこゝろをやはらくる事古

の哥仙先達にもはつへからす花のはるの詩哥

紅葉の秋の月の艶かゝりの下の蹴鞠南庭の御弓

四季にしたかひての御遊にもまつこれをめされき

鳳闕の庭ニ侍日ハ清涼の雲に望て日をつくし夜宿

の御いとまを給はらざりし時ハ紫震の床を守て夜

をあかず朝恩他にことなり家ゆたかにしてハ須達檀

彌梨かいきをいをうつし所從眷屬七珍萬寶ニあ

きみてりかゝりしかとも君なをあき不思議して

いそぎ庭尉にもなざるへき御氣色しきりなりしか

とも庄周のもゝとせの榮おもへハ一夜こてうの夢

いくほとたのしみかあらんとおもふにもとかく遁申

にハ奉公をいたせとも内ニハ世のあたにはかなきあ

まを歎彼坂上の政佐ハ地獄におつと夢にみて檢非

違使にならしとて五位の冠を賜きなどおもひいて

られて妻子珍寶及王位 臨命終時不隨者 唯戒及施

不放逸 今世後世爲伴侶とつねにこのもんをこゝろ

かけくる 抑 閑に案するに人身をうくる事梵天よ

糸をくたして大海の底なる針を貫かことしとい

又佛法にあふ事盲龜のうき木のあなにあへるにおな

とみえたりされともまほろしの榮にこゝろをかけ一

旦の妻子ほたされて後世の苦因をうくる事 哀哉

すきにし廿五年のたのしみおもへハうたゝねの夢

よりもはかなしたとひ此後二十年三十年あり

ともいくはくの思出かあらん我才かたちを東域にう

たりといへとも遙に西天の教法をきくことをえたり

たれか此時つとめおこなはずして寶の山に入て

手をむなしくせんや此故ニ龍樹并ハ富といへとも願

こゝろやまさされハ是を質とすひんなりといへとも

もとむるこゝろなけれハ是を富と云へり書寫の

上人ハ臂をかゝめて枕とすたのしみ其中にあり

何によてかささらに浮雲の榮耀を求やとの給へり

これらの理をおもふにも出家のこゝろさしいよく

ふかしといへとも大方朝恩のかたしけなき恩愛

すてかたきにあんしわつらひてむなしく月日を

おくりける事あさましく覺て

いつなけきいつおもふへきことなれハ

後の世しらて人のすくらん

いつのよになかきねふりの夢さめて

おとろくことあらんとすらむ

なにことにとまるこゝろのありけれハ

さらにしもまたよのいとほしき

此人つねに難波津の風をあをきこゝろのうちの

塵をはらひ富の小河の流を汲て思を凝たよりとす

此故ニ君よりも折ニふれ時にしたかひて題をくた

されけれハ時をうつさすよみ奏しけり立春題ニて

岩間とちしこほりも朝ハとけそめて

こけの下水みちもとむなり

鶯の聲そかすみにもれてくる

人めともしきはるのやまさと

〔繪1〕 憲清の館

大治二年十月十日ころ鳥羽殿に御幸ならせ給てはしめたる御所の御障子繪とも觀覽あるニ誠ニゆふなる御氣色にて其比の哥讀達經信匡房基俊并に憲清などをめされて此繪とも題としておの／＼一首の詠を可奉由おほせ下されけるに面々に營ミよまれける中にも憲清其日の中ニつかまつりて奏申ける春の雪つもりたるやまのふもとに河なかれたるところをかきたるにふりつミしたかねのみ雪とけにけり
 きよたき河のミつのしらなみやまさとの柴のいほりにひしりのみて梅を詠するやうをかきたるをみて
 とめこかし梅さかりなる我やとをうときも人のおりにこそよれ
 花のもとにて月をなかむる男をかきたる所に雲にまかふ花のしたにてなかむれば
 おほろ二月もミゆるなりけり
 夏のはしめ郭公をたつぬるとてやまたの原のすきの村立のなかにわけいりたる所を
 きかすともこゝをせにせんほとゝきす
 やまたのはらのすきのむらたち
 郭公のはつねたつぬるかいありてきゝえたる所を
 郭公たかきみねよりいてにけり
 とやまのすそに聲のきこゆる

清水なかるゝ柳のかけに旅人のやすむ様をかきたるところを

みちの邊にしみつなかるゝやなきかけ

しハしとてこそたちとまりけれ

秋のはつかせ草葉をむすひ下葉の露もおき

ところなくこゝろほそき所を

あはれいかに草はの露のこほるらむ

秋かせたちぬミやきのゝはら

やまたもるいほの邊ニ鹿のなきたる所を

おやまたのいほちかくなく鹿のねに

おとろかさされておとろかしけり

おくらやまののみちあらしにさそはれ月さやかなる所をかゝれたるをみて

おくらやまふもとのさとに木葉ちれハ

こすゑにはるゝ月をミるかな

たかき山に雲かゝりうちしくれたる風情をかきたるを

秋しのやとやまのさとやしくるらむ

いこまのたけに雲そかゝれる

かやうに十首奏申ければ觀感にたえさせまし

7 ますす其時の手書定信時信をめされてかゝせらる

又憲清をめされて頭の辨をもて朝日丸と云御劍を

にしきの袋にいれて賜ふ其外女院の御方へめされ

て中納言の局のうけ給はりて御ハしたものとのおとめの

まへをもてかさね十五の御衣を賜てかたにかけて

まかりけれハみるもの上下めをおとろかしうらや

ますと云事なし我身にもしやうかい面目何事か
 是にしかん今生のしう心いよ／＼ふかくやとそおほ

「えし

其夕宿所にかへりたれば妻子眷屬つとひあつまり

さかへのまゆをひらきよろこひのえミをそふくみ

ける是につけても名聞利養ハ惡道の因縁妻子

9 所従は生死のきつなといふ事もおもひいたされて

これもかへりて佛道をすゝむる善知識かなとうれし

き方も侍きかくて日西にかたふき月東にいつる

ほとにおよひてあひしたしき佐藤左衛門尉

憲康と云ものとうちつれて罷出ミちにて憲康

かたりけるは我才か先祖秀郷將軍東域をしつめて

より以來ひさしく朝家の御守としてよをしつむ

今我才ニいたるまで當帝の朝恩ニよくしてひろく

ほまれをほとこすこの程いかにやらん何事もたゝ

夢幻の心地して今日あれハとて明日をまつへき

身とおほえすあはれいかならん使もかな家を出

さまをかへ片山里のすまひもあらまほしくこそ覺

ゆれなんと誠しくかたれば憲清も今更かゝること

を語ハいかならんするやらむと胸うちさわきたかひ

11 袂をそしほりけるさて憲康はあしたハたれも

いそぎ鳥羽殿へまいるへきなり打寄さそひ

給へとて七條大宮ニとゝまりけり

「に

〔繪2〕 1鳥羽殿の障子絵の歌をよむ
2女院に召され御衣を賜わる

憲清次の朝憲康をさそへむとて大宮に打寄たり
ければ門の邊二人おほくたちさわき内にもさまく
にかなしむこゑきこゆあやしとおもひていそぎ
すゝみより何事ならんと問へ殿へ今夜ね死しな
せ給ぬとて十九ニなる妻七十有餘なる母跡枕に
たふれふしてなきかなしむ是をみるにかきくらす
心地してかくあらんとておもはざる外のはかな

事をかたりけるとおもふにもはしめておとろく
へき事ならねともあやなしといふもおろかなり我
身も身とも不覺いとらうとましき方のミしけくて

朝有紅顔誇世路 夕成白骨朽邦原と

くちすさみ小水の魚にころをすまし屠所
の羊におもひをかけやかてころにてもとよりをきら
まほしくおもへとも今一度龍顔をも拜し御いと
まをも申さんとおもひて小馬ニむちをすゝめて参
けり抑 此人は憲清ニハ二年のあにゝて廿七そかし
老少不定のならひとひなから哀に覺て

こへぬればまたもこのよにかへりこぬ
してのやまちそかなしかりける

よのなかを夢とみるくはかなくも
なをとるかぬ我ころかな
とし月をいかてわか身にをくりけん
きのふミし人けふはなきよに

〔繪3〕 憲康の死をいたむ

ことにきらめきて参たりければ折節鳥羽
殿にハ御遊ありけるにやかて憲清を被召御遊
はて後頭辨殿をもて出家のいとまを申しれ
たりけれハおもはずの外の御氣色なりとはかり
被仰下たりけれとも君の御いましめをおそれ今度
出家をとまりて又あひちやくすみかにかへりなハ

いつをか期とすへき夫奇恩入無爲は如來の教剃
髪染衣ハ解腕の門出なりと觀して禁中をまかり
いてけるにも花のもとと好客月のまへの閑人につら
ならむたゝいまはかりなりと覺てたひく仙洞を
かへりミ小馬をひかへくなくくつくりみちにそ

けるさてもすきにし二月のころ出家事をおもひ
さためたりしにおりふしそらかすみころほそ
かりしに
そらになるころは春の霞にて
世にあらしともおもひたつ哉

ころさしあさからすといへとも其期やきたら
さりけんなにとなきわさともにさへられてむな
しくはせすきぬ同秋のころ思立たりしにかせの
おとさへものあはれに月の光もくまなかりしかハ
おしなへてものをおもはぬ人にさへ
ころをつくる秋のはつかせ

世のうさにひとかたならつうかれ行

ころとめよ秋の夜の月

ものおもひてなかむるころの月の色に

いかはかりなるあはれそふらむ

秋もむなしのかれぬ願ハ三寶このたひの出家
さわりあらせ給なといのり申てかへりけり

〔繪4〕 憲清出家の願いを奏上

ゆふへにおよひ宿所に歸り指入はとしころいとを
しくおもふ娘の四になるかふりわけかみもかたすき
ぬ程にてよにらうたけなる有様なにころなく
縁にはしりいて父のおはしますうれしさよ
なとおそく御歸ありける君の御ゆるしなかり

けるにやなといひてよにとけなきなてしこの
すかたにてかりきぬの袂にすかりけるをたくひなく
いとをしくはおもへともすきにしかた出家を思
とまりしもこのむすめのゆへなりされハ第六天
の魔王ハ一切衆生の佛になる事をさへむかために
妻子といふきつなをつけをき出離の道をさまたく
といへり是をしりなからいかて愛着のころをな

さんやこれこそ陳のまへの敵煩惱のきつなをきる
はしめなりとおもひてこのむすめを無情縁
よりしもへけをとしたりければちいさき手を顔

おほぬなを父をしたいなきけれハ是につけても
ころくるしくハおもへともきいれぬさまにて内
いりぬかたわらの女房下部にいたるまでよにあへ

なき事におもひてこはいかなる事やらんとさわきあへりしかれとも彼の女房ハかねてより夫の出家のころさしある事をしりたりけれハ娘のなきかなしむ事をおとろくいるなしこれにつけてもあはれに覺て

露のたまきゆれハまたもあるものを

たのみもなきはわか身なりけり

月すてに中ハふけてみねのあらし軒葉の松ニ

ひきよそのきぬた聲愁霜ニまじる虫の音枕に

よはりよろつころほそからすと云事なし此時ニ

あたてとしころの妻ニ向てあるへき事ともさまく

「に

ちきれとも返事ニも不及たなくよりほかの事ハ

なしむかし阿難尊者摩登伽女と云外道の娘ニあひ

すてに禁戒をおかさんとし給しを佛神通をもてみ

給て文殊に仰て佛頂神咒をみて給しかハ欲心漸

うせて戒を破り給事なし是一世二世の契に

あらず五百生の縁なりと佛説給きこれらを思に

このよひとつにあらず後生にハ必一蓮すの身となり

共ニ無生忍を證すへしとさまくにかたれともなを

かへりこともせず大方ほいなくはおもへともと

「る

へき道ならねハころつよくおもひきりて自

もとよりをきりて持佛堂ニなけいれかとのほかへ

いてけるかさすか二十五年のあひたすみなれし

やとなれハたゝいまはかりとおもふにもころろの

うちかきくらしそのほかの契をかうハしふせしつま四ニなるむすめの事かたくせんかたなくておもひのなミたは袖ニあまりみちしはの露にもあらそふはかりおほえ侍りけり

〔繪5〕 1四歳の少女を縁より蹴落す
2妻と別れを惜しむ

としころ西やまの麓にあひしりたりけるひ

しりのもとはしりつき曉方ニおよひてつゐに

出家とけにけり法名西行といふまたとしころ身ち

かくめしつかいけるもの同さまをかへにけり彼をハ

西住とつけにけり次の朝庵のあたりなる聖達あ

つまりてこはいかにおもはすの御事かなあさましく

「も

とておとろきあやしみけれハ西行

うけかたき人のすかたにうかひいてゝ

こりすやたれもまたしつむへき

よをすつる人はまことにすつるかハ

すてぬ人をそすつるとはいふ

世をいとふなをたにもまたとゝめをきて

かすならぬ身のおもひいてにせん

〔繪6〕 西山の聖のもとで出家剃髪

夫涅槃經の三馬の譬へにあてて早くも世を

すてぬる事うれしく覺へ侍れ心をしつめて思へ

はたまく佛法に値因果の理をしり幸に善縁に

ちかつき菩提の妙道をきく而に何の宗をも學し

何なる行をも修せずして常住の佛性を具しなから流轉の妄業をのみ造り出離の善因なき事返も愚なり此今生一世のみならず後生にハ彌

流轉の業によて六趣のちまたにめぐり四生の形に

くるしみ無窮の生死をうけ多劫のくるしみに

しつまんことあさましかるへし先剃髮染衣の形

とならハ戒儀を旨とし欲をすて愛をはなる

へきに猶妻子を帶し三毒五欲をほしひまゝに

し五戒十善をもたもたす爰に無常の殺鬼

貴賤を衡らはず別離の魔滅老少をろむせぬ習

なれハ事と思とたかい樂と苦と共なりされハ此時

恩愛のきつなをきり無爲の家にすみ俗塵を

すて道門に入ことうれしく覺へて西山の邊に

柴の菴をむすひてすみ侍けり

さひしさにたへたる人のまたもあれな

いほりならへん冬の山さと

身のうさを思しらてやゝみなまし

そむくならひのなき世なりせハ

歳もくれぬこそまてハなにとなく公私二つけて

ありし事共思出て

年くれしそのいとなみハさもあらて

あらぬさまなるいそきをそする

むかしみし庭にうき木をつミをきて

みしにもあらぬ歳のくれかな

あら玉の年立歸朝ハ君の御ため身のため千秋

萬歳富貴ハ萬福といはひし事とも夢幻のことし

有漏の妄法なりけりとあさましくてひきかへて西に
むかひ臨修正念往生極樂とそいのりける

〔繪7〕西山の庵で新年を迎える

かすならぬすまゐなれとも春をわすれぬ花なれハ
菴の前なりける梅さかりにさきにほひ人をとゝ
むるならひにや行すり人すきかね立寄なめけれハ

心せんしつかかきねの梅の花

よしなくすくる人とゝめけり

かをとめん人をこそまで山里ハ

かきねの梅のちらぬかきりハ

其隣なりける軒葉の梅風にさそはれてよその

袂まで常にほひけれは

ぬしいかに風わたるとていとふらん

よそにうれしき梅のほひを

〔繪8〕庵前の梅を行人めぐる

柴のあみ戸のあけくれハ佛の御迎をいつならん

とまちたてまつるにさもあらぬ昔の友花見に

とてあつまりける次にもなにとなき昔語にも

心のみたるゝ方もありけれハよしなしとおもひて

花見にとむれつゝ人のくるのミそ

あたら櫻のとかにはありける

〔繪9〕花見に旧友たずねくる

(中巻)

30 さても太神宮に詣侍りぬ御裳濯河の邊杉

の村立の中にわけ入一の鳥居の御前にさふらひ

て遙に御殿を奉拜き抑當社三寶の御名を

いミ法師の御殿ちかくまいらぬ事ハ昔此國いまた

なかりける時大海の底に大日の印文ありこれに

よて太神宮あまのさか銚を指入てさくり給けるに

其銚のしたゝり露のことくに成りけるを第六天

の魔王遙にみて此したゝり國とならば佛法流布し

人倫生死を出へき相ありとてうしなはんとしけるニ

太神宮三寶の名をもきかす我身にもちかつけれ

と誓給き其御云によて外にハ佛法をうときこと

にし内にハ三寶を守護し給き天の岩戸を

おし開遂に日月の御光にあたる物皆是當社

恩徳也惣て大海の底の大日の印文より事をこ

りて胎金兩部の大日内宮ハ胎藏界の大日玉垣水

かき荒垣なと重々なる事四重曼荼羅をかた

とれり外宮ハ金剛界の大日或ハ彌陀ともならひ

たてまつる而るに我朝ニ鎮坐ありし御事ハ垂仁

天皇廿五年に至て太神宮の御云のりによて

伊勢國度會の郡五十鈴河のみなかみ 宮柱ふとし

きたてゝ天照御神を崇奉りてやかて天皇の皇女

大和姫を齋宮といはひまいらせてあまつひむろきを

そなへあめかしたをハをさめ代々の御門宗廟として
今ニ目出くましゝ就中に御殿の萱ふきなる

事御供をたゝ三件つく事も國のついで人のわつ

らひを思食故なり千木も鳥居もすくにかつほ木

たる木もまからさること人の心をすなをならしめん

と思食されは心すなをにして民のわつらひ國の

ついでハをとおもはん人定めて神慮ニかなふへきなり誠

不生不滅毘盧遮那法身の内證を出て愚癡顛倒

四生の群類をたすけんと迹を垂まします本意

生死の流轉をやめて常住の佛道ニ入しめんとなり

生をも死をも共ニいみ佛法を修行し浄土菩提

をねかふ人殊に神の御こゝろにもかなひ只今生の

榮花福徳をのみいのり道念なからん者ハ神慮ニも

かなふへからすなんと本地のふかき利益を仰き和光

の近き方便を思に信仰の涙墨染の袖にあまる

しはらくありてかくなん

宮柱したついはねにしきたてゝ

露もくもらぬ日のひかりかな

ふかくいりて神路のおくをたつぬれハ

またうへもなき峯のまつかせ

神路山の嵐おるせは峯の紅葉ハ御裳濯河波に

しき錦をさらすかとうたかハれぬかき松をみ

やれハ千年のみとり梢にあらハる同深山の月なれハ

いかに木の葉かくれもなんとおもふにことに月の光

すみのほりけれハ

神路山月さやかなるちかひにて

あめのしたをへてらすなりけり

さかき葉に心をかけんゆふしてを

おもへハ神もほとけなりけり

〔繪1〕伊勢神宮に参詣

いつくもつぬのすみかならねハ忝なくも天照^{アマテラス}

御神^{カミ}の砌³⁴に侍りて後世井の事をも祈申さ

はやとおもひておなしくハ名にしほふ所なれハと

て二見浦にいほりをむすひて輔親の祭主

の玉くしけ二見浦のかいしけみまきゑにみする

松の村立と詠せしことゝもおもひて霞の

ひまよりもりくる月景とをき波間にかすかなり

ける折節

おもひきや二見の浦の月をみて

あけくれ袖に波かけんとは

波こそと二見の浦にみえつるは

梢にかゝる霞なりけり

〔繪2〕二見浦に庵を結ぶ

花のさかりにも成ければ神路の山の櫻吉野の

山もはるかにすくれたりければ神官共御裳

濯河の邊に集て詠しけるに

岩戸あけし天津御ことのそのかみに

さくらをたれかうへハしめけん

神路山みしめにこもる花さかり

こはいかはかりうれしかるらん

風の宮の花ことにわりなくさき亂たるをみて

この春ハ花をおしまてよそならん

こゝろをかせる宮にまかせて

〔繪3〕神官らと御裳濯河の桜をめめる

月讀^{ツキミ}の宮ニ詣^{ユキ}てたりけるに誠にも名にしほひ

て月の光おもしろく花さかりなりければ

梢みれば秋にかきらぬ名なりけり

春おもしろき月讀のもり

さかやなる鶯^ヤのたかねの雲まより

景やはらくる月よみのもり

鶯の山月を入ぬとみし人や

こゝろのやみにまよふなるらん

櫻の宮の花風にさそはれ木のもとにちりうき

雪のつもるやらんと覺へてやるかたなかりけれハ

神風に心やすくそまかせつる

さくらの宮のはなのさかりを

〔繪4〕月読の宮に詣て、月光を賞す

さても此所にやすらひてすてにミとせあま

りにも成ぬこゝろさしたりし東の方もゆかし

けれハ命の程もしりかたしとてすてに出んと

するに日比あさからすなれちきりし人々あつま

りて夜もすから名残をゝしみ紋哥^{ヅカ}の曲に心を

とゝめたかひに袖をしほりけりおりふし其夜月
おもしろかりければ

君もとへ我もしのへんさきたゝは

月をかたみにおもひいてつゝ

〔繪5〕親しい人々と別れを惜しむ

すてに東の方へくたるに日かすつもれハ遠江

國天中^{チナ}の渡といふ所にて武士のゝりたりける船

に便船をしたりけるほとに人おほくのりて舟

やあやふかりけんあ³⁷の法師おりよゝといひけれと

も渡のならひと思てきゝ入ぬさまにてありけるに

情なくむちをもて西行をうちけり血なんと頭より

出てよにあへなく見へけれとも西行すこしも

うらみたる色なくして手を合船よりおりにけり

此を見て共^{とも}なりける入道なきかなしみけれハ西行

つくくゝとまふり都を出し時路のあひたにてい

かにも心くるしき事あるへしといひしハこれそ

かしたとひ足手^{アシテ}をきられ命をうしなふともそれ

全く恨^{ウラミ}にあらす若古の心をもつくへくハ髪を剃

衣を染^{ソメ}てこそあらめ佛の御心ハミな慈悲先とし

て我かことくの造悪不善^{セン}のものをすくひ給されハ

あたをもてあたを報すれハ其怨^{ウラミ}やます敵³⁹をもて

恩を報すれハあたすなハち滅と云へり經の中にハ

無量劫のあひた修たる善根も一念悪をおこせハ

皆焼失とも云へり又不輕芥はうたるゝ杖をいたます

我深敬汝才不敢輕慢所以者汝等皆行芥道と

て猶禮拜恭敬し給き此皆利他をむねとし佛道
修行のすかたなり自今以後もかゝる事ハあるへし
たかひに心くるしかるへけれハ汝ハ都へ歸とて
東西へそ別ける此の同行の入道も西行かそのかミ
の有様とも思出て今かゝる事みて心うく覺へ
けるも理にこそ哀なり

〔繪6〕天竜川の渡して難にあう

西行心つよくも同行の入道をハおひすてたり
けれども年來あひなれし者なれハさすか名残ハ
おしかりけれどもたゞ一人少夜中山ことのまの明神
の御前ニ侍りて

若以色見我 以音聲求我
是人行邪道 不能見如來

と禮拜してさやのなか山をこへてかくなん
としたけてまたこふ^遊へしと思きや
いのちなりけりさやの中山

〔繪7〕小夜の中山の明神に参詣

只獨嵐の風身にしみてうき事いと大井
河しかひの波をわけ涙も露もおきまかふ墨染
の袖しほりもあへず行程にするかの國岡部の宿と
云所に付てあはれたる御堂に立寄やすみて居
たりけるに何となくうしろの方をみやりたり
けるにふるき檜笠のかげられたるをあやしと見
にすぎにし春の比都にてたかひにさきたゞハ

西行物語繪卷 詞書

還來穢國最初引接の契をむすひし同行の東

の方へ修行に出し時あなかに別を悲ししかハ

此を形見にとて我不愛身命但惜無上道とかきたり

しか笠ハありなから主ハ見えさりけれハおくれさき

立ならひはやもとのしつくと成りにけるやらん

と哀に覺へて涙をおさへて宿の者にとひけれハ

京より此春修行者のくたりてありしか此御堂

にていたはりをしてうせ侍りしを犬のくひみたして

侍きかはねハちかきあたりに侍るらんといひけれハ

たつぬるにみえさりければ
笠ハありその身のいかに成ぬらん

あはれはかなき雨のしたかな

かくうちなかめて行程に初秋風身にしみいつ

しか野邊のけしきも物あはれに虫の聲

おとつれたりことつてをまつとしもなきこしちの

鴈もおとつれこゝろほそく覺へて

あき立と人ハつけねとしられけり

み山のすその風のけしきに

おほつかな秋ハいかなるゆふへあれハ

すそるにものゝかなしかるらん

白雲をつはさにかけてとふかりの

かたたのおもにともよはふなり

〔繪8〕岡部の宿

むかし業平中将つたかへてにみちまよひ夢にも
人にあはすなりゆくとなかめけん宇津の山邊を

すくるにも昔人戀しき心ちして清見か關に

つきぬれハおきの波みきハの岩にくたけ月の光

しほにみちたるありさまきゞしよりもわり

なく覺けれハ

清見かたおきの岩こそ白波に

ひかりをかはず秋のよの月

〔繪9〕清見が關で月を賞す

駿河國にかゝりて在中將の山ハふしねいつとてかと

いひけんもことハりと覺て遙にふしの高峯をみ

あくれハおりしりかほの煙立のほり山の中半ハ雲

にかくれふもとにハ湖水をたゞへ南にハ郊原

あり前にハ蒼海まんくとして釣漁のたすけに

便あり都を出ておほく山川江海をしのきし

旅のうさも此所にてすこしわするゝ心ちして

覺えけり

風になひくふしの煙のそらにきえて

ゆくゑもしらぬ我おもひかな

いつとなきおもひハふしの煙にて

まどろむほとやうきしまかハラ

〔繪10〕遙かに富士山を眺む

あしからの山にかゝりて昔實方の中將の名もあし
からの山なれハとなかめ又白霧山深鳥一聲といひ
し人の事とも思出さるゝ折節木枯の風身に
しむハかりなりければ

山里ハ秋のすへにぞ思ひしる
かなしかりけり木からの風

相模國おほはといふ所とかみか原をすくるに
野原の霧のひまより秋風⁵⁰にさそはれしかの
鳴聲^{ナケ}きこへければ

糸はまとふくすのしけみにつまこめて

とかみか原におしかなくなり

そのゆふくれかたにさへへのしきとひたつ

おとしければ

こゝろなきみにもあはれはしられけり

しき立さはの秋のゆふくれ

〔繪11〕 相模のとがみが原で鹿鳴をきく

さしていつくを心さすともなければ月の光にさそ

はれてはるく⁵¹と武藏野にわけ入ほとにお花か

露にやとる月末こす風に玉ちりて小萩かもとの

虫のねいとこゝろほそく武藏野草のゆかりをたつ

ねけんもなつかしくやとをは月にわすれてあす

の路行なんとくちすさひて行程に路より五

六町ハかりさし入て經を讀誦する聲しければ

人里ハ此のすゑに遙にへたゝりたるところそ

きゝしにあやしと思ひて聲に付て尋入て

見ハわつかなるいほりのうへをハすゝきかるかやに

てふき萩女郎花色々の秋の草にてめぐりをかこひ

夜もふす所と覺えて東によりてわらひのほと

ろをおりしき西の壁に繪像の普賢をかけ奉り

御前にハ法花八軸をかれたり庭にハ千草の花露ニ
かたふき虫の聲、所からにあはれにいつこそ
事とふ人もあらしとおもへはかよひちもたえに

けり菴のうちを見入たれハかうへにハ雪をそり⁵³

まゆにハ霜をたれたる老僧九十ゆふよと覺たるか

在於閑處 修攝其心^{コシ} とよみたてまつるもし

仙人なんとにてもやとあやしくおもひて八月十五

夜名にたかはぬ月の景なれハいつくのかくれかまて

もまかふへき方なし⁵⁴あゆみより前に侍りけれ

ともたかひにあきれたるさまにて物もの給はず

良久ありて西行いかなる人のかくてハおはするや

らんと問けれとも答ことなしかさねて我ハ是都

の邊の者なり東の方ゆかしくてくたり侍るか武

藏野の秋のけしき古里にてきゝしよりも哀に

覺えてわけ入ほとになんこれよりハ人すむ方も遙

なりときくなにか便の御すまひにかいにしへの御

事もゆかしくなんといへハ老僧昔郁芳門院の侍

の一藤にて侍しか女院かくれさせ給て後出家して

國ニ修行せしか此野邊佛道修行のかくれかにな

ありとおもひて二十九の歳よりすてに六十餘年此

所にとままれりされハ讀誦の數七萬餘部なりと

かたる西行も郁芳門院の御事もよそならぬ御事

なれハたかひにかたり苔のたもとをしほり名殘は⁵⁹

おしく覺えけれとも曉方立別るゝとて⁶⁰

いかて我きよくゝもらぬ身となりて

こゝろの月のかけをみかゝん

いかゝすへき世にあらはこそ世をもすてゝ
あなうの世やとさらにとはん

秋ハたゝこよひハかりの名なりけり

おなし雲井に月ハすめとも

〔繪12〕 武藏野で老僧の庵をたずねる

みちの國へくたりけるに白河の關といふ所にとゝ

まり能因入道ミヤをハ霞とゝもに立しかと秋風

そふく白河の關となかめしも事とも思ひ出てことに

月さえおもしろかりけれハ關屋の柱に⁶¹

しら河の關屋を月のもるからに

人のこころをとむるなりけり

次日關山をこへて遙ニ行ほとに七度くもり八度

雨ふるとかやのこゝちして時々あめうちふりことに

物あはれなりけるそのゆふくれ

たれすみてあはれしるらん

やまさとのあめふりすさむゆふ

くれのそら

〔繪13〕 白河の關屋に和歌を書く

さても關屋を立て日かすゝくる程に遙なる

野中にゆききれてしつかふせ屋のありける

にやとをかり立入けり夜ふくるまゝに月くま

なく都にてのなかもかすにもあらず覺てさて⁶³

も月みんたひにはたかひにおもひてんと

ちきりし人のこと思出られて

ミヤこにて月をあはれとおもひしハ
かすにもあらぬすさみなりけり

月みハとちきりおきてし古里の
人もよこよひ袖ぬらすらん

〔繪14〕野中の賤が屋で都をおも

かくてつほのいしふミぬまたちなんと云所をすき
である野の中をすくりにことありかほの墓の見え
けるを草かりけるをのこにあれハいかなる墓そと
とひけれハこれなん實方中將ときこへし人の御
はかといふをきくにあはれに覺て

くちもせぬその名ハかりをとゝめをきて

かれのゝすゝきかたみにそみる

はかなしやあたにいのちの露さえて

野邊にやたれもをくりをかれん

〔繪15〕実方中將の墓を弔

(下卷)

あくろやつかるゑひすかしましのふの郡衣河

いつれをわきてなかもへしとおほえすしてゆく

ほとに出羽陸奥兩國をしたかへひらいつみと云所

にすみ侍りける秀衡とて威勢の物侍りけり兼

より和哥の道なをさりならずゝき侍るよしきゝし

程にかしこへたつねゆきたりけれハよろこひ

秀衡對面して我先祖よりいまに至まで西行に

うとからぬことなんかたりて世のつねならずもてな
し

けりある時秀衡かたりけるはたまゝ幸に此國へ

くたり給へり戀の百首をすゝめ申事侍りよみて

給はりなんやといひけれともとかくいなみてよまさ

〔り〕

けるか千里の濱草の枕にて見たりし夢のこと

なんと思出ゝ少ゝつらね侍りけり

たてそめてかへる心ハにしき木の

ちつかまつへき心ちこそせね

身をしれは人のとかとハおもはぬに

うらみかほにもぬるゝ袖かな

くまもなきおりしも人を思出て

心と月をやつしつるかな

あはれとて人の心のなさけあれな

かすならぬにハよらぬなけきを

たのめぬに君こやとまつよひのまハ

ふけゆかてたゝあけなましかハ

あふまてのいのちもかなとおもひしハ

くやしかりけるわかゝろかな

〔繪1〕平泉で秀衡の館を訪ねる

かくて四五年もとゝまり給へきよし秀衡申

けれとも無益なりと思て秋の末方に成りて出ニ

けりあるかた山景のはにふのこやにとゝまりたり

けるにねやの秋風身にしみきりゝすの聲よはり

行も哀に覺えて

きりゝす夜さむに秋のなるまゝに

よはるかこゑのとをさかりゆく

都ならねともとのくれにハ我もゝとそいそ

きともをするもあはれに覺て

つねよりも心ほそくそおほえける

旅のそらにて歳のくるれば

うき身こそいとひなからもあはれなれ

月をなかめてとしのくれぬる

〔繪2〕植生の宿できりぎりすの音をきく

とし立歸りければ深山邊の霞とともにおもひたち

ミヤこの方へ行程にある野中にあをやきのいと

おもしるきをうへまはし軒葉にハ木くらきほとに梅

を植ならへたれハ花さきみたれたりければ人とゝ

めねと行もやられぬにほひのゆかしさに此

ふせやにとゝまりけり

ひとりぬる草の枕のうつりかハ

かきねのむめのにほひなりけり

山かつのかたをかかけてしむる野の

さかひにたてるたまのおやなき

〔繪3〕青柳・梅に心ひかれて逗留す

かくて山と寺とをつたひ行ほとに四月のハしめ

はかり美濃國までのほりたりけるにさすかすてし

なからも都の方事ともゆかしく覺えてそなたの

便もかななとうちあらます折節郭公二聲三聲
おとつれてすきければ

ほととぎすみやこへゆかハことつてん
こゑをくれたる旅のあはれを

〔繪4〕美濃国で時鳥の声をきく

心にまかせぬいのちなれハ二度ひ舊里にかへり

都の有様をみれハをくれさきたつためしすゑの露

もとのしつくと成はて、此十餘年のあひたにめぐり

きてなれむつひし人々をたつぬれハ皆鳥邊の⁷²

山のゆふへの煙とのほり船岡山の朝の露ときえ

はてとむなしき名をのみあさちふやよもきかもとニ

ととめをきそのすみかをとへは庭もそともとひと

つにてむくしの門草のとさしのみふかくしてうつら

のねやとあれはてたる所々百六十餘家なりされハ

此程にあたなるうき世に我身いかにとしてつれ

なくものかれきつらんとあさましく覺えてなを胡⁷⁴

馬北風にいハへ越鳥南枝にすくふとやらの風情ニ⁷⁵

古里をしたふ心にひかれて又かへりきぬる事我

こころなからもうたてしく覺て

かすならぬ身をも心のもちかほに

うかれてハまたかへりきにけり

物おもひてなかむる比の月いろに

いかはかりなるあはれしるらん

これやみし昔すみけるやとならん

よもきか露に月のかゝれる

年來しりたりける人のもとへ尋行たりけるに

男ハ早うせにけりとて女房ハかりなきみたりけれハ

西行出さまに障子に書付けり

なきあとのおもかけをのみ身にそへて

さこそ八人のこひしかるらめ

〔繪5〕都に帰り旧知をたずねる

京中もなにとなくそらくなる事のみありて

心みたれければ

はるかなる岩のはさまにひとりゐて

人めおもハて物おもハはや

あはれとてとふ人のなとなかるらん

ものおもふやとのおきのうハかせ

しほりせてなを山ふかくわけいらん

うきこときかぬところありやと

大内右近の陳をすくとて見入たてまつれば鳥羽の⁷⁶

院の御時にもにすかへりはてたりければ西行

情ありし昔のミなをしのはれて

なからへハうき世にもあるかな

かくうちなかくて北山の奥にかたのことくなる柴

の菴をむすひてをこなひ侍りけるにおなし心なる

友なかりければ心すこく覺て

山里にうき世いとはん人もかな

くやしきすきし昔かたらん

〔繪6〕北山の奥に庵を結ぶ

神無月比賣金剛院の紅葉みにとて人々さそひ

ければ待賢門院の御時の女房達あまたもみちを

をらせなとしてたハふれ給けるを西行みてむかし

の事とおもひいたされて近衛のつほねのもとへ

申つかハしける

紅葉みて君かたもとやしくるらん

むかしの秋を思出つゝ

近衛の局の返事

色ふかき梢をみてもしくれつゝ

ふりにしことをかけぬませなき

〔繪7〕宝金剛院の紅葉を観る

次歳七月十五夜ことに月あかゝりけるに京中の貴

賤みなく船岡蓮臺野にあつまりてなき人をかす

に訪を見るにもあはれに覺えて

いかてわれこよひの月を身にそへて

しての山路の人をてらさん

人々かすくゝに火なともすをみて

初秋のなかの五日のこよひこそ

なき人かすのほとハみへけれ

むしのねをきくて

そのをりのよもきかもの枕にも

さこそハむしのねにハむつれめ

〔繪8〕 船岡、蓮台野で故人を弔う

中の院の右大臣出家の志あるよしよもすから御物語
ありけるに折節月くまなかりければ⁷⁹

夜もすから月をなかめて契をきし

そのむつことにやみハはれにき⁸⁰

返事⁸⁰

すむとみし心の月もあらはれて

この世のやみハはれもしにけん

中の院右大臣うけ給ハりにて戀の百首めされけれハ

勅定そむきかたき⁸¹による

なにとなくさすかにおしきいのちかな

ありへハ人や思し⁸²るとて

かすならぬこゝろのとかになしはてゝ

しらせてこそハ身をもうらみぬ

思ひ⁸³しる人ありあけの世なりせば

つきせす物ハおもハさらまし

おもかけのわすられましき別かな

名残を人の月にとゝめて

うとくなる人をなにとてうらむらん

しられすしらぬおりもありしに

あひしりたりける人あつまへくたるよしきゝ遣ける

君いなハ月まつともななかめやらん

あつまの方のゆふくれのそら

〔繪9〕 中の院の右大臣と語りあかす

四國の方へ修行せんと思立にとしころ仕まつりし

賀茂の宮にも御いとま申さんとして御幣なんと用

意して仁安二年十月十日比事なるに御前にちかつ

かん事も此の度ハかりなと思ひて内へもまいらぬ身

なりけれハなみたをなしかくなん

かしこまるしてに涙のかゝる哉

またいつかハとおもふあはれに

此秋とをく修行^{シユ}するときこしめして白河の大納言

殿より被⁸⁴送り

嵐吹みねの木の葉にとまひて

いつちうかるゝこゝろなるらん

返事西行

なにとなくおつる木の葉も吹風ニ

ちり行かたをしられやハせん

〔繪10〕 賀茂社に参詣

待賢門院の女房世をのかれて小倉山のふもとにい

ほりをむすひてすみ侍りける所にゆきてみれハ

きゝしよりもなをかすかにあはれなるすまひなり

風のおともあはれにかけひの水もたえゝにおとつ

れ峯の妻木をひろい谷^{タニ}のした水をむすふたより

までもひとかたならぬあはれ涙をもよをさすといふ

ことなし此人世にありし時ハかたち人にすくれ心

さまいふによろつ人のこゝろをつけ給しそかし

今ハひきかへてみとりの髪ハ雪ニかハリあをやきの

まゆすみハ霜をかさねたり老のなみかほによせ

こき墨染のたもにかハりはてたるありさま

よにあはれに覺て

山をろすあらしのをとのけハ⁸⁵しさを

いつならひける君かすみかそ

此哥を見て同院の女房兵衛の局あひしたし

かりけるかかへし

うき世^をには嵐のかせにさそハれて

家を出にしすみかとそみる

〔繪11〕 小倉山に待賢門院の女房をたずねる

天王寺へ詣けるに道にていと雨ふりけれハ江口の

君かもとに宿をかれともきゝ入ぬさまにてさ様の

人をは此にハとゝめすと申けれハ西行かくそかき付

て出ける

世の中をいとふまてこそかたからぬ

かりのやとりをおしむきみかな

遊君とも此をみてよひかへして返事

世をいとふ人としきけハかりのやに

こゝろとむなとおもふハかりそ

〔繪12〕 江口の君の宿にあまやどりする

すてに天王寺に参て暫ありけるかもとより

四國の方へくたるへき心さしあるうへ新院のあらぬ

「さま

にてなかさされせ給し御事もかたしけなくも⁸⁸
御ありさまゆかしさに讃岐の方へくたらんとするに
あひなれし同行ともあなからにとゝめければ

たのめをかん君も心やなくさむと
かへらんことはいつとなくとも

月のいろにこゝろをきよくそめましや⁸⁹

みやこをいてぬ我身なりせハ

〔繪13〕 四天王寺に参詣

讃岐國に下付て新院の御有様尋申に後世の
御つとめなんとも渡せ給けるよしきゝて

若人不嗔打 以何修忍辱 と申て奥に

世中をそむくたよりやなからまし

うきをりふしに君かあハすハ

新院はやくくれさせ給ぬと聞に涙もとゝまらす四

五年ハかりありて讃岐の松山といふ所に付てわたら

〔せ

給ける所を問に跡もなかりければ

松山の波に流てよる舟の

やかてむなしくなりにける哉

昔ハ一天四海をなひかし百官萬乗にあをか

いさゝかも天氣にそむかすいかにもして龍顔にも

ちかつき論言をもちかうふらハやなんとこそありし

に十善の玉の臺なをふりすて佛法の名をたニ

さかぬとをき嶋ふかき山中にすてをき奉る事

あまりの御いたハしさに御墓の前にしハらく

侍りてなくく

よしや君むかしの玉のゆかとても

かゝらんのちハなにゝかはせん

〔繪14〕 崇徳上皇陵を弔う

かくすまひありき同國善通寺と申は弘法大師⁹⁰

御誕生の御佛法流布の靈地なりけれハかしこに

いほりをむすひ二三ねんおこなひ侍りけりさても

あるへきならねは都の方へとおもひ立けるに軒葉

の松も人ならはたかひに名残もいかにおしからん

なんとおもひて

こゝをまた我すみうくてうかれなハ

松ハひとりにならんとすらん

〔繪15〕 善通寺附近に庵を結ぶ

すてに都に歸のほりて昔ゆかりありし人のもとへ

尋行てとゝまり夜もすから古へ今の事ともかた

りてたかひに袖をしほりけるにあるしの

語て云くさてもさはかりいとをしからせ給し姫

君の事いとをしさよ御出家の後やかて母御前も

さまかへて一二年は姫君と一所におハせしか九條の⁹²

刑部卿の娘め冷泉殿御局と申人御子にしまいらせ

てよにいとをしくしまいらせさせ給候き其後母御⁹³

前ハ高野のふもとあまのと云所におこなひてお

ハしき此七八年ハかりそめのおとつれもなし

このほと冷泉殿むかへ腹の御むすめに伯耆三位

殿と申人をむこにとりて此姫御前を上落女

房にしまいらせて侍かたゝあけくれハ佛神に御⁹⁴

宮仕をのみ申て今生にて父の御ゆくゑしらせせ

給へとてなくより外の御事なしと語りけれハ西行⁹⁵

きゝ入ぬさまにもてなして歸りけり

〔繪16〕 都に帰り家族の消息をきく

かくて次日西行冷泉殿あたりなりける所に行て

あるしをかたらひて彼むすめをよひけれハ我父こそ

さやうに道心おこし給たるときゝしかと思ていそぎ

ゆきて見れハ墨染の衣ニやせゝと給たるあり

さま見もならハぬ心ちしてけれとも我父と聞からに

なみたもとゝまらす西行もありし花遊のすかた

にもにすよにけたかくもねひたる物かなとあハ

れに覺えけり西行申けるハとしころハたかひに

行ゑもしらさりしニいまこそみたてまつれ抑親

と成子となる事先世の契あさからすされは我教⁹⁷

訓に付給て候やと云ニ親にてわたらせ給ハゝいかて

〔かたかへ

奉るへきと云へハ悦ていまたいとけなかりし時ハ心

〔ハかり

ハいかにもてなしかしつき院内へもまいらせんなど

こそ思しに我身かやうになるうへハちからをよはす

〔されハ

かくすてなからも常ニ心のみたるゝハたゝ御うへな

〔り

さしもなき宮仕八人にあなつらるゝ事なり此世ハ思
「へハ」

夢まほろしのことしわかくさかんなる物老をとろふ
「るに」

程もなし只尼ニ成りて母と一所にて後世をたすかり

給へ我極樂に詣て¹⁰⁰はいそき迎奉るへしと云へハしハ
「し」

うち案してなみたをおさへて我おさなくよりして

父母にもそひたてまつらすよろついやしき身と成侍
「る」

されはいかならん便もかなさまかへんと思ひ侍つる
「にといへハ」

西行悦てしかくの目めのとのもとへそと契て歸り
「けり」

〔繪17〕 娘をたすねる

其日にもなれハ髪などあらひてまつほとにむかへの
車よせたりければすてに¹⁰²いてんとしけるか

いかく思けんしはらくとて内へ入冷泉殿をつくく
「とま」

ほりてなみたくみて出にけりさて待かねて冷泉

殿より迎にやりたりければハやさまかへて出に
けりと¹⁰³きよて此兒六のとしよりかた時たちはな

るゝ事なくてたくひなくこそおもひしに我

おもふほとハなかりけりとうらみ給にけり但いて
さまに我をつくくとまほりし事こそあはれなれ

とてなきかなしみ給にけり

きえにけるものしつくをおもふにも

たれかハす糸の露の身ならぬ

〔繪18〕 娘の迎いに車を遣す

西行むすめをむかへとりてたけなるかみをゆいわけ

出家受戒さつて云く我在俗の昔ハ世路をわし

りて地獄のすみかを尋ね出仕奉公のほこりを悦て

妻子珍寶に心をとめ¹⁰⁴火宅いてさりぬ

夫花ハつめに風にしたかひ月ハ出て雲ニかくる

昨日見し人今日ハなし風のまへの燈ひいなつまの

景夢まほろしのたくひと觀して頭燃をほらひ
すてゝ出家をとけ山林流浪の行を立て乞食頭陀の
身となるといへとも九夫くわくの身なを汝か事を
わすれす今すてに出家をとけ給ぬ今生ののそ
みたんぬへし人目にハ女人なりといへともかならず
「當」

來の佛子なり常に此文をたもち給へとて

極重惡人 無他方便 唯稱彌陀 得生極樂
若有重業障 無生淨土因
乘彌陀願力 必生安樂國

常に此文をわすれ給へからすたかひにミへ見奉事

今をかきりなり淨土にてハ待奉へし夫高野山ハ

弘法大師入定の禪勸慈尊下生の佛土なりされは

此山のふもとにあま野と云靈地あり汝か母この所に
ありときくゆきて共に佛道をいのり給へしと

云へは娘尼公もなく申¹⁰⁵けれハ我四歳にして父
「に」

すてられ七にして母に別たてまつりてたゝ中有の

闇にまよひ人をおそろしとのみ思てあかしくらし

侍きされハおさなくよりして出家の志侍りしかとも

女の身なれハかなはぬ事のミあり今うれしふ出家を

とけ侍ぬ我ニ萬寶をあたへ給とも只一旦の夢なり今

の教化の御詞要文を後生の道しるへにて淨土にて
は三人かならずとてなくくわかれけるこそ哀なれ
「西行」

はるかに見送て

のかれなくついにゆくへき路をさハ

しらてはいかゝすくへかるらん

月をみて心みたれしにしへの

秋にもさらにめぐりあひけり

〔繪19〕 西行の娘出家剃髪す

此尼高野の麓とはかりハきゝつれともいつくを

さしてゆくへき方もおもほへすうきことかたる友

もなし心ひとつをしるへにてならハぬ旅の草

枕こよひハしめのかりねとて我なみたこそある
物を秋の露さへおきそへて袖も枕もうきゆめの
すゑもはかなくおとろきてさすかわすれぬ古郷の面
影のミ身にそひて心みたるゝ夜半なれハゆふつけ
鳥の曉の八聲ともになきあかしひるハひるとて
たつぬへき草のゆかりもおほえねハおちかた人の

わけそめした、道柴をしるへにてなくくたとり
ゆきけれハ道行人のあやしきもこれハたゝ人に
あらずいとをしやなんといひて涙をなかしけり
さて日數もつれハあま野にたとり付て母のすミ
ける菴にたつねあひてあり昔今¹⁰⁷の事とも
たかひにかたり合ともにつとめおこなひてあかし
くらしけるとそ聞え侍し

〔繪20〕西行の娘尼、天野に母の尼をたずねる

其後西行大原の奥にこもりて行けるにかけひ
の水もこほりて春にならてはあかの水なとも
えくむましきと申あひけるに春立たりけれ
ともなを氷りとけやらすいつくむへしともみえさ
りければ

わりなしやこほりかけひの水うへに¹⁰⁸遊い

おもひすてにし春そまたるゝ

深山こそ雪のした水とけさらめ

みやこのそらは春めきぬらん

大原¹⁰⁹ハひらの高峯のちかければ

ゆきふるほとおもひこそやれ

一院かくれさせ給てやかて野¹¹⁰へ御さうそうの夜高

野より西行參あひてあはれさにかくなん

こよひこそ思ひしるらめあさからぬ

君にちきりのある身なりけり

すておさめ奉らんとてひさしの御車あらぬ^(に)

さまにみえて御共の人く袖をしほりければ

路かハる御行かなしきこよひかな
かきりの旅とみるにつけても

すてにおさめまいらせて御共にさふらはれける
人くかきりなくなけきかなしみなからもさて
のミあらぬ御事なれば皆かへり給けるに西行
獨とまりのちの世の御訪申さんとてあくるまで
侍りてよみける

とはゝやとおもひよらてそなけかまし

むかしなからのうきみなりせは

〔繪21〕西行大原の奥にこもる

閑ニ昔を思へは生ねん二十五の歳仙洞の北面を出て
妻子珍寶をふりすて佛前に向てたふさをき
りつるに火宅を出て深山の奥のいほりを尋^尋

ねて心を八功德水にすまし思を九品の淨刹に^{淨刹}

かけき後にハ諸國を頭隨し山林斗藪^{トノウ}の行を立て

て平才一子の思に住して衆生の機にしたかひて

教化をあたへき常ニ慈悲のたもとの上にハ歡喜

の涙をのこひ忍辱の衣の裏にハ無價眞實^{シンシツ}の玉を

つゝみきかくて五十餘年¹¹¹をせすきし夢人一日

一夜をふるに八億四千萬の思ありしかれとも懺悔^{ザンケ}六

情根^{コシヤウ}のためにハ三十一字の詞のはをくちすさむ

此悪心をやめて佛道を成する媒なりと觀して

東山の邊り雙林寺^{サウリン}の傍に菴をむすひて觀

念の窓の前にハ三明の月の光を友とし稱名^{ネンミヤク}

の床の邊りにハ攝取^{セツク}の御迎を待てあかしくらし

けり御堂の砌りに櫻をうへられたりけるにおなしく¹¹²
此花さかり釋迦如來入涅槃の日二月十五の朝往生
をおもひてかくなん

ねかはくハ花のもとにて春しなん

そもきささきのもち月のころ

既に此哥のことく建久九年二月十五日正念たゝ
しくして西方に向て

若人散亂心 乃至以一花

供養於畫像 漸見無數佛

於此命終即往安樂世界阿彌陀佛

大菩薩象圍繞住處 とゝなへて

ほとけには櫻の花をたてまつれ

我のちの世を人とふらはゝ

となかめて十返念佛やむことなくそらに伎樂^{キガク}

の音ほのかに異香遠く薫し紫雲遙に^{フク}

たなひきて三尊來迎のよそほひ聖象歡喜^{シヤウ}

儀式萬人耳目を驚かし往生の素懷を遂けり¹¹⁴

さて高野¹¹⁵のふもとあまのにありける西行か

同行の尼は夫にハ遙ニまさりたるこゝろつよき

ものにて男出家の時やかてさまかへあま野といふ

所にこもり古里のつてたよりをきくことを

いとひ常にハ無言を行彼むすめの尼を善知

識としてをはりをかねてより覺え念佛やむこと

なくねふるかこくとして往生をとけにけり娘の¹¹⁷

尼も一生不犯の身にて正治二年八月彼岸之比¹¹⁸

是も往生ありかたきほとに遂にけり西行往生

後都の内の哥よみたちあとをしたひ袖をしほ
らぬハなかりけり中にも左近中将定家井院の
三位中將のもとへ西行往生事を被申ける奥に

もち月のころハたかはぬそらなれと

きえけん雲のゆくゑかなしも

三位中將公衡ヒラの返事

むらさきの色ときくにそなくさむる

きえけん雲ハかなしけれとも¹¹⁹

〔繪22〕花の下、西行往生を遂ぐ

注 本絵詞と板本西行物語（板本と略）及び西行上人
発心記（発心記と略）を校合して示すものである。

板本は寛永十三年本の再板の「松会開板」本、発心
記は文明社版『西行全集』本によった。

- 1 板本「ゑもんの大夫」発心記「左衛門大夫」
- 2 板本「申しのかれ」発心記「通れ申す」
- 3 板本「貧なりとしまつしといへ共」発心記「貧とす
貧なりといへども」
- 4 板本「とめるといへり」発心記「富むといへり」
- 5 板本「すてかたさ」発心記「すてかたさ」
- 6 板本・発心記「今朝は」
- 7 板本「たへさせましましけり」発心記「たへさせま
します」
- 8 板本「かへりて」発心記「帰りつるに」
- 9 板本「かへりて」発心記「是も却りて」
- 10 板本「語りける」発心記「語りけるは」
- 11 板本・発心記「たもとをしほりける」
- 12 板本「きこゆれば」発心記「きこゆ」

- 13 板本「あやしみ思ひて」発心記「あやしと思ひて」
- 14 板本「思へば」発心記「問へば」
- 15 板本「今宵」発心記「今夜」

16 板本・発心記「朝には紅顔にあって世路を榮え、夕
には白骨と成って郊原に朽ちぬ」とよみ下す

17 板本「仰下されけれ共」発心記「仰せ下されけれ
ば」

18 板本「夫奇恩入無為は」発心記「夫れ生死無常は」

19 発心記「髪を剃り衣を染むるは」とよみ下す

20 板本・発心記「つらならんも」

21 板本「父」発心記「則清」

22 板本「こゑうれへ霜にまじる」発心記「声寒く霜に
まじる」

23 板本「覚え侍る」発心記「覚えて」

24 板本「仏法にもあひるんくはのことはりをしり」発
心記「仏法に逢ひて、値因果の道理を知り」

25 板本「るてんのもうこうをつくり」発心記「流転の
妄業をのみ作り」

26 板本「まごう」発心記「魔業」

27 板本・発心記「昔おもふ庭」

28 板本「ひきかへて」ナシ」発心記「引替へて」

29 板本「詠ければ」発心記「ながめければ」

30 発心記は「ここに大神宮に詣で待るとて、鈴鹿山に
て、鈴鹿山うき世をよそに振り捨て、如何に成り行く
我身なるらむ」と和歌一首を挿入する。

31 発心記は「御殿を押し奉りき」につづいて「何事の
おはしますとは覚えねどかたじけなさに涙こぼれて」
を挿入する。

32 板本「外にはしやもんのかたちをいみ」発心記「外

には仏法をうとき事にし」

33 板本「御かき」発心記「齋垣」

34 板本「には」発心記「砌」

35 板本「祭主が」発心記「祭主の」

36 板本「天中」発心記「天龍」

37 板本「ふねあやうかりけん」発心記「舟危かりけれ
ば」

38 板本「いにしへの心をもつべくば」発心記「古の心
も有るべくば」

39 板本「恩をもて敵を報ずれば」発心記「恩をもって
怨を報ずれば」

40 板本・発心記「あれたる」

41 板本「その身は」発心記「その身の」

42 板本「も身にしてみて」発心記「身にしてみて」

43 板本「けしきもあはれに」発心記「景色も物哀に」

44 板本「ゆへのあれば」発心記「故なれば」

45 板本・発心記「かと田のおもに友したふなり」

46 板本「夢にもあはずなりゆく」発心記「夢にも人に
あはぬなりけり」

47 板本「ふもとに湖水をたへへ」発心記「麓には湖水
を湛へ」

48 板本「心ちして覚えける」発心記「心ちして」

49 発心記にはこの後に「木枯よ木の葉の落つる夕暮は
涙さへこそもろくなりゆけ」の一首が挿入される。

50 板本「風」発心記「秋風」

51 板本「むさしの国にわけ入る」発心記「武蔵野にふ
み入る」

52 板本「いづこぞととふ人」発心記「言とふ人」

53 板本「雪ふり」発心記「雪をいたゞき」

- 54 板本「かたもなし」発心記「方なし」
- 55 板本「くだり侍りしが」発心記「下りけるが」
- 56 板本・発心記「是より人すむかた」
- 57 板本「何を御たよりの」発心記「何をか便の」
- 58 板本「老僧郁芳門院の侍」発心記「我は是昔は郁芳門院の侍」
- 59 板本「なごりおしく」発心記「名残は惜く」
- 60 この後に発心記は「茂き野を幾一むらに分けなし」更に昔を忍びかへさむ」を第三首目挿入。また発心記では1「秋はたゞ」2「いかで我」3「茂き野を」4「いかすへき」の歌順になっている。
- 61 板本「ながめし事ども」発心記「詠ぜし事ども」
- 62 板本「(やとをかり)ナシ」発心記「宿を借り立ちとゞまりけり」
- 63 板本「都にてのながめかすにもあらず」発心記「都にて眺めしは数にもあらず」
- 64 板本「実方の中將と聞えし人の御はかといふを聞き」発心記「実方の中將と聞えし人の塚と云ふに」
- 65 板本「ひでひらよろこびたいめんして」発心記「秀衡悦びやがて対面して」
- 66 板本「うとからぬ事などかたりて」発心記「うとからずなむ万の事語り尋ね」
- 67 板本「夢のことなむ思出て」発心記「夢の事思ひ出て」
- 68 板本「人のとが共」発心記「人のとがには」
- 69 板本「いそぎをする」発心記「営する」
- 70 板本「ならべたるが」発心記「ならべたる所あり」
- 71 板本「にほひゆかしさに」発心記「匂のゆかしさに」
- 27 板本・発心記「鳥辺野のゆふべ」
- 73 板本・発心記「むなしき名のみ」
- 74 板本「つれなくのがれ」発心記「つれなくも遁れ」
- 75 この和歌板本になし
- 76 板本「大内右近のを過」発心記「大内左近のを過」
- 77 板本「待賢門院の御時女ばうたち」発心記「待賢門院の御時の女房達」
- 78 板本「いかでわれ」発心記「いかでわが」
- 79 板本「御物語ありける折ふし」発心記「御物語ありけるに折節」
- 80 板本「御返事」発心記「右大臣返し」
- 81 板本「ちよくちやうそむきがたきによりて」発心記「勅定背きがたく侍りて」
- 82 板本「思ひするやと」発心記「思ひするとて」
- 83 発心記にはこの歌なし
- 84 板本「をくられる」発心記「送られる」
- 85 板本「一かたならぬあはれに」発心記「一方ならぬあはれ」
- 86 板本「けはしきは」発心記「はげしさを」
- 87 板本「をは」発心記「には」
- 88 板本「しげなくも」発心記「忝くも」
- 89 板本「そめまして」発心記「染めましや」
- 90 板本「かくてすまゐりき」発心記「かく修行し歩き」
- 91 板本「二三年侍りけりさてしも」発心記「二三年行ひ侍りける 折節月くまなかりけるに 曇りなき山にて海の月見れば鳴ぞ少しの絶間なりける さて」と、発心記は和歌を挿入する。
- 92 板本「九条の刑部卿のひめ冷泉院殿の御つぼねと申す子にし参らせて」発心記「九条の刑部卿の姫冷泉院の御局と申す人の御子にし参らせて」
- 93 板本「世にいとおしく参らせ給ひ候き」発心記「世にいとほしからせ給ひき」
- 94 板本「女房にし参らせて侍り」発心記「女房に参らせて侍り」
- 95 板本「御行ゑを知らせ給へ」発心記「御行方知らせ給へ」
- 96 板本・発心記「なき給ふよりほかの」
- 97 板本「教訓に付給ひてんやと言ふ」発心記「孝訓につき給はむやとのたまへば」
- 98 板本「参らせんなどこそ思ひしに」発心記「参らせむとこそ思ひしに」
- 99 板本「あなどらるゝ」発心記「あなづられ」
- 100 板本「まふでなば」発心記「参でなば」
- 101 板本「めのとのもへとぞぢぎりてかへりける」発心記「乳人の許へ来たれと契りて帰りける」
- 102 板本「出んとしたりけるに」発心記「出でむとしけるが」
- 103 板本「聞えて此ちご六の年より」発心記「聞きて冷泉殿仰せけるは此姫六つの年より」
- 104 板本「火宅を出ざりぬ」発心記「火宅を出でざりき」
- 105 板本「申しけるは」発心記「申しける」
- 106 板本「あかつきのことゑと共に」発心記「暁の八声と共に」
- 107 板本「むかしの事共」発心記・「昔今の事ども」
- 108 板本・発心記「水ゆへに」
- 109 発心記はこの歌が最初に位置し、2「わりなしや、

3 「深山こそ」の順になる。

えせず

110 板本「野への御葬送」発心記「野辺にて御葬送」

111 板本「五十余年をはせすくし若人一日一夜をふるに」発心記「五十余年を過ぎしは一炊の夢なりされば人は一日一夜をふるだに」

112 板本「(おなしく)ナシ」発心記「同じくは」

113 板本「千遍念仏やむことなく」発心記「念仏やむことなく」

114 板本「とげたり」発心記「遂げにけり」

115 板本「(高野のふもと)ナシ」

116 板本「あま野にありける妻の尼は心つよきものにて夫出家の時」発心記「天野にありける西行が同行の比丘尼夫には遙にまさりける心強き者にて西行出家の後」

117 板本「ねふるがごとくに」発心記「睡れるが如くにして」

118 板本「不犯にして」発心記「不犯の身にして」

119 発心記はこの後に次の和歌がつづく

又定家

願ひける花の許にて死に、けり蓮の上にさこそあるらめ

又西行閑居に侍りし時、折々念仏の隙に詠みし歌

心をば西に懸種の水の音とくくとのみ急がる、かな

なかなか嬉しかりけり我年の極楽近くよると思へば

三つ四つにわくる心の乱れ糸の今一筋によるぞ嬉しき

心にはたすけ給へと隙もなく南無阿弥陀仏の音も絶

正誤

江上 綏

「美術研究」二七七号の拙稿「興福寺藏紺紙金字成唯識論の莊嚴画」において次のような誤植が存したので、訂正させていただきます。

二頁上段、最後から三行目 原初のものとか↓原初ものものと
一五頁上段、挿図九 鴨の飛翔↓鴨の飛翔

また、二六八号「本願寺本三十六人集表紙絵の復元と考察」において引用した資料の中に二字読み違いのあることに気付いたので、その文献の部分と関連箇所を次の如く訂正させていただきました。

二頁上段、七行目 御印↓讀取
同、 一二行目 奥書と印↓奥書
同、 一五行目 印が擦され↓(削除)